

〔結論〕

血糖コントロールを主目的に入院した患者において、6ヵ月後HbA1c 7%未満が達成できないことに関与する因子は、入院が2回目以上であること、診断確定から入院、または初診から入院までの期間が長いことであった。糖尿病自体の自然経過および患者の治療意欲の関与が考えられる。

論文審査の要旨

糖尿病の治療において血糖コントロールを目的とした教育入院プログラムは有用であるが、教育入院の効果が十分でない場合の要因についての検討は少ない。本研究では、血糖コントロールを主目的として入院した2型糖尿病患者の入院6ヵ月後のHbA1cの目標値の未達に関与する因子を検討した。その結果、入院が2回目以上であること、診断確定から入院まで、または初診から入院までの期間が長いことが因子として抽出された。これらの結果は、患者の治療意欲を高めることと、早期治療（入院）の重要性を示したもので、臨床的に意欲のある論文である。

28

氏名	西 卷 桃 子
学位の種類	博士（医学）
学位授与の番号	乙第 2598 号
学位授与の日付	平成 21 年 10 月 16 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当（博士の学位論文提出者）
学位論文題目	Clinical characteristics of frequently recurring painless thyroiditis: Contributions of higher thyroid hormone levels, younger onset, male gender, presence of thyroid autoantibody and absence of goiter to repeated recurrence (無痛性甲状腺炎の頻回再発に対する血中甲状腺ホルモン、発症年齢、性、甲状腺自己抗体、甲状腺容積の影響)
主論文公表誌	Endocrine Journal 第 56 巻 第 3 号 391-397 頁 2009 年
論文審査委員	(主査) 教授 高野加寿恵 (副査) 教授 岩本 安彦, 田邊 一成

論文内容の要旨

〔目的〕

無痛性甲状腺炎は甲状腺組織の崩壊により生じる一過性の甲状腺中毒症であり、妊娠、分娩、糖質ステロイド薬中止などが誘因となる。しかし、誘因がなく頻回に再発する症例が存在し臨床的に問題となる。今回、誘因なく頻回に再発した症例について調査し、頻回再発の病態について検討した。

〔対象および方法〕

特に誘因がなく甲状腺中毒症を 4 回以上発症した無痛性甲状腺炎患者 8 名を対象とした。また、中毒症が 3 回以下であった 40 名をコントロール群として臨床所見と検査所見を統計学的に比較検討した。

〔結果〕

対象群患者 8 名では甲状腺中毒症の発症は 7 回が 1 名、5 回が 1 名、4 回が 6 名であった。コントロール患者 40 名では 3 回が 4 名、2 回が 4 名で 1 回が 32 名であった。対象群患者は男性 5 名、女性 3 名であり、コントロール群（男性 8 名、女性 32 名）に比較して男性が有意に多かった。発症年齢は 16~61（中央値 32.5）歳でコントロール群の 24~84（中央値 40.5）歳と比較して有意に低かった。また経過中の遊離サイロサイロキシン（FT4）および遊離トリヨードサイロニン（FT3）の最高値も 4 回以上の頻回再発群で有意に高かった。性別、甲状腺腫の大き

さの程度、甲状腺自己抗体の有無、発症年齢および甲状腺ホルモン最高値を独立因子として頻回再発を従属因子として行った多変量解析では FT4 の高値、男性、発症年齢の低値、甲状腺腫の欠如、甲状腺自己抗体陽性が有意の寄与因子であり、これらの 5 因子の寄与率は約 27% であった。

〔考察〕

無痛性甲状腺炎の頻回再発にはホルモンの高値、男性、若年、自己抗体、比較的小さな甲状腺腫が関与することが明らかとなったが、その病態にはホルモン貯留が保たれているが破壊されやすい何らかの甲状腺の構造的または遺伝的素因が関与する可能性が考えられた。

〔結論〕

甲状腺ホルモンが高値、男性、若年、甲状腺腫が小さく、抗体陽性の患者では無痛性甲状腺炎が頻回に再発する可能性が高いことが明らかとなった。

論文審査の要旨

無痛性甲状腺炎は一過性の甲状腺中毒症であり、誘因がなく頻回に再発する症例が存在し臨床的に問題となる。無痛性甲状腺炎を発症した 48 例につき、4 回以上頻回に発症した 8 名（対象群）と 1～3 回発症の 40 名（コントロール群）に分類して臨床的特徴を検討した。対象群は男性 5 名、女性 3 名であり、コントロール群（8：32）に比較して男性が有意に多かった。発症年齢は 16～61（中央値 32.5）歳でコントロール群（中央値 48 歳）と比較して有意に低かった。また経過中の遊離サイロサイロキシシンおよび遊離トリヨードサイロニンの最高値も頻回再発群で有意に高かった。種々因子の多変量解析では甲状腺ホルモンが高値、男性、若年、甲状腺腫が小さく、抗体陽性の患者では無痛性甲状腺炎が頻回に再発する可能性が高いことが明らかとなった。

本研究は無痛性甲状腺炎の頻回再発の寄与因子を明らかにし、臨床的にも有用な論文である。

氏名	野津朋子
学位の種類	博士（医学）
学位授与の番号	乙第 2599 号
学位授与の日付	平成 21 年 11 月 20 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当（博士の学位論文提出者）
学位論文題目	A comparison of the clinical features of ANCA-Positive and ANCA-Negative idiopathic pulmonary fibrosis patients (特発性肺線維症における ANCA 陽性例と ANCA 陰性例の臨床比較)
主論文公表誌	Respiration 第 77 巻 407-415 頁 2009 年
論文審査委員	(主査) 教授 永井 厚志 (副査) 教授 新田 孝作, 高野 加寿恵

論文内容の要旨

〔目的〕

ANCA 陽性肺線維症と ANCA 陰性肺線種症の臨床的相違について検討した。

〔対象および方法〕

1999～2006 年の間に東京女子医科大学呼吸器内科に入院し、ANCA を測定できた特発性肺線維症（IPF）53 例を対象とした。これらを ANCA 陽性群と ANCA 陰性群に分け、症状、肺機能検査、胸部 CT、気管支肺胞洗浄（BAL）、治療効果、生存率について検討した。